

特集 | これからの学びの場

これからの学校は、知識習得を中心とする「学習の場」としてだけではなく、多様な共創を生み出す「学びの場」としての役割が求められています。そのため、静かに過ぎてせる個別空間や教職員と関われる中間領域、相談や支援が受けられる空間などの整備が必要とされ、その空間を柔軟に活用できる仕組みを整えることや、地域と連携した複合施設化などへの取組みも行われています。

一方で、少子化により学校の統廃合が進む中、教育資源の効率化と引き換えに子どもたちの「居場所」が失われるリスクもあります。こうした状況の中で、廃校を地域の交流拠点として再活用する動きが注目されています。廃校を、公的サービスや社会事業、地域交流が可能なまちづくりの拠点として再生することで、学校は地域に開かれた「共生の場」として、実際に機能し始めています。

さらには、ICT が一人ひとりの個別最適な学びを支援すると同時に、クラウドによる情報共有が図られ、教室内にとどまらない対話を生む取組みや、すべての人が同じ環境で学び合える、インクルーシブデザインを取り入れた学校づくりが不可欠な要素となっています。

このような「個別最適な学び」と「社会的なつながり」の両立を支える空間と運用の再構築が必要です。少子化が進む今だからこそ、学校施設は縮小ではなく、社会インフラとして、子どもたちだけでなく多様な人々に応える形へと進化すべきです。学校は単なる教育施設ではなく、地域の核であり、未来を育む「共創の場」です。教育・建築・地域づくりの各分野から多角的に取り組む事例を特集することで、これからの学びの場のあり方を考えるきっかけとなれば幸いです。